

## The Dragon Boat Race in Wu-ling, Hunan

Chao Wei-pang 著

瀬戸口照夫 抄訳

競漕する船の頭 (headman) に選ばれる人は、勇ましくて家庭をもっていなければならない。彼は、競漕の何日か前に、一枚の紙と蒸菓子餅を競漕にたずさわる人々に分配し、金銭を支払う。その紙の上部には、龍船がプリントされ、下部には何某かの文が書かれている。頭の親類や富裕な人々は、競漕の期間中に、食物と酒を提供するように指示される。良い食物や多くの食物を提供することは、名誉なこととされている。ある者は、彼等が誓願したという理由で、食物を提供する。競漕が実施される日に、川には小船が出る。その船上には、2本の木が立てられており、その木には紙幣と色づけされた絹布がつり下げられ、演奏者が曲をかなでている。その小船は、食物を運ぶのである。乗組員は十分に飲食できるけれども、提供された食物と酒はひとつも残さずに飲食しなければならない。もし、いくらか残すようだと、皿と箸と共に水中へ投げ込まなければならない。船が帰岸した夜に、人々は船の水をぬき、いろいろ混ぜ合わせた草で船体を洗う。その草は、悪意を回避させることができるといわれている。これは一種の清の儀式でもある。

船の乗組員は、全てすぐれた泳者であるが、頭、旗振り、太鼓打ち、舟舷打ちは泳ぐことができなくてもよい。漕手は、彼等の運命を負わされているのである。乗組員全員が、一日中頭部に祈禱師に与えられた護符を付け、髪に東洋しらさぎの羽のついた黄赤色の小さな旗を刺している。観客は、文字の書かれた赤か緑の絹布を手下げ、船が通り過ぎるときに、贈物としてそれを船に与える。人々は、自分達の地域に属する船が通過するとき、花火を打ち上げ、黄色の煙をたき、扇を振り、拍手喝采する。もし自分たちの地域に属してない船であるならば、彼等はそれを嘲笑するかのように騒ぎたて、幾人かは怒ったように、船に瓦ですら投げつけるのである。乗組員は、あたかも彼等と戦うかのように權を持ち上げ、腕を振り上げる。

花船 (flower boat) の神は、梁王 (Liang Wang) と名付けられている。梁王の像は、冠をかぶり、正装していて、武器を持った恐しい警備兵に付添われている。彼は、漢の梁松 (Liang Sung) であるが、彼は、馬援 (Ma Yuan) 後の五溪蠻 (Wu-hsi Man) を征服するために速急に送り出された軍を指揮した。この神は、土着の人々によって、陽山 (Yang-shan) で礼拝されている。劉禹錫の詩に、「昔、漢家の息子が野蛮人を征服し、山神と共に、今日まで残忍な供犠を楽しんだ」とうたわれ、他の詩に、「梁 (Liang) の国王の三人の息子の風采と道徳は崇高であった」とうたわれている。それらの詩の中に言及されている人が彼である。彼のために社殿が川の南岸に祀られている。春に果実が熟し、秋

に菊が咲くころになると、人々はその息子達を祀るためにそこへ行く。あるいは、楽しむためだけでその社に行くこともある。花船が漕がれるとき、供犠が社殿に献じられる。花船の龍の頭部は、この神の姿のように刻まれている。龍のうろこや尾は五色に塗られ、船上の二本の旗は白色である。その後には五色で龍が刺しゅうされ、あるいは描かれている。頭、梢、太鼓たたき、旗持ち、舟舷打ちの衣装は、黄色か白色である。この船の所有地域は、神県、清平、常武と七里橋の近辺である。賽花船、あるいは「花船と同類のもの」は、花船とほとんど同じような龍や旗や五人の男の衣装を保持している。その神は、靈官 (Ling Kuan) として知られている。賽花船を保持している地域は、竹竿港とその他の地域である。紫紅の船 (purple boat) は、紫紅のうろこや尾の龍を持ち、旗もまた紫紅に塗られている。しかし、5人の男達の衣装は黄白色である。その神は、李才將軍として知られ、彼は川や湖の帆船や船を統轄する資格の証として、赤色の棍棒と一本の竹を持っている。この船は、槐花提と清泥港の地域に保持されている。白船 (white boat) は、純白の龍のうろこ、尾、旗と衣装を持ち、その神は老官、羊頭三郎、竹馬三郎であり、名々片方の手に權を持ち、他の手は握りしめているか、あるいは色付きの球を持ち、あたかも遊んでいるかのようなのである。昔、竹郎という神がいたというのが、竹馬三郎と同一であるかどうかははっきりしない。白船は、拱辰と永安と善徳寺の周辺の地域に保持されている。黒船 (black boat) の龍のうろこや尾は黒色であり、赤船 (red boat) のそれは赤色である。双方の船は赤旗を持ち、乗組員は黒色の衣服である。他の船の漕手は、色々な色の衣装を身につけているが、赤船と黒船の漕手はすべて黒色の衣装をまとっている。この二艘の神は、黄公大伯、二伯と三伯であり、各々黒い顔をしていて、手に一本の權を持っている。彼等は、溺死した時に神格化されたインドの水夫の兄弟であったと伝説的にいわれている。これらの船を所有している地域は、臨沅門、大河街、徳山港、白沙村である。

龍船の区域はそれぞれ境界線がある。ある地域の人々は、他の地域の人々とはもちろんのこと、同じ地域の人々とさえも勝負に関していさかうのである。子供や女性でさえ、口数多くいさかうのである。先祖はA地域に住居していたが、現在はB地域に移住している人々のほとんどが、いまだに競漕に関してはA地域に属するのである。ある者が他の地域に移住し、どこの地域の船とも争わないなら、彼は前の仲間にくらまれ、臆病者として非難されるのである。人々は、将棋や拳や飲みくらべをするときでさえ、「勝」以外一言もしゃべらない。時折、彼等は太鼓の音を模倣するように、「tung, tung」と大声で呼び、漕手と合わせて「勝て、勝て」と、手に持った木の葉を波立たせるのである。慣習的に人々は、上述のように競漕に対して大きな感心を持っているのである。さまざまな等級の役人達は、彼等もまた異った船の地域に属しているけれども、もちろん、競っている各集団に分かれるべきでない。がしかし、実際には彼等もまた、常民の心にしたがって分かれるのである。

船上の二本の旗は、1.5尺の四方形の布で作られている。楚辞のひとつに、「〔神靈〕は

つむじ風を利用し、雲の旗に乗る」とうたわれ、また、韓愈の羅池廟碑には、「候爵の〔神靈〕は、2本の旗をかかげている船に招来する。中流を横切って行くとき、風に足止めされる」とある。その旗は、神と精霊を導くためのものである。ボートを漕ぐことによる屈原の招魂は、沅水における彼の死を嘆くことばかりでなく、確かに深い意義をもっている。屈原は、楚辞において、以下のようにうたっている。

「私は屋形船に乗り沅水を溯る。

通常の方法で櫂は波を打つ。

船は前後し、前進しない。

船は逆流によって前進をはばまれ、とどまっている。」

（舳船に乗りて余沅に上る。

呉の棒を斉しくして汰を撃つ。

船容與として進まず、

回水に淹まりて凝滞す。

「藤野岩夫 漢詩大系第三卷楚辞 集英社 昭和42年 188頁）」

これは、彼の生涯に彼の身に起った圧迫と意気沮喪を表わしている。そのため、後世の人々は早く太鼓を打ち、速く漕ぐことでそれを清める。その詩は再び次のように続けられている。

「朝、私は枉渚を出発する。

そして、夕方に辰陽に宿まる。」

（朝に枉渚を発し、

夕に辰陽に宿す。

「前掲書 188頁）」

沅水と枉渚は、武陵にある。

龍船は、船に固定した龍頭をもってない。何艘かは一瞬のうちに龍頭を組み立て、そしてただちに取り除く。うろこを付けられた約3尺の長さの鵝項（goose neck）と呼ばれる単なる木製の首が、龍船の船首に立てられる。木製の首の側には、<sup>かしら</sup>頭が立っている。昔、黄色の船は、龍の頭、骨、足、うろこを所有している河湫龍の人々によって造船され、その船体は本物の龍の体のように作られたといわれている。それは、乗船した全ての人々と共に水没した。そのため、龍船はいかなる龍頭も持たない。ある人は、龍船が水没したのは、漕手が龍井（dragon well）出身であったからだという。とにかく、黄色の船はこのような理由でもはや使用されることはない。

昔、緑色の船は、清平門外の人々のものであり、青竹標と呼ばれていた。われわれは、それがいつのころから使用されなくなったか知らない。今日、その神を祀る小さな社が存在するだけである。

人々は、岸から競漕を観る。清平門から石碓に至るまでの約5～6里ある北沿に沿って、

3、4階ある高い建物が並んでいる。人々は、その建物から競漕を観るために、前もって賃借料としてより多くの金銭を支払わねばならない。そうしなければ、他の人々にとられてしまうのである。競漕の日、人々は、酒や食物を持って、荷馬車に乗り、あるいはその道に沿って歩いて行く。おおよそ己の刻（午前9～11時）に彼等は全て集まる。果物と食物はテーブルの上にならべられ、果物のうちで最も良いものは、韓家李のすももと麦黄桃とされている。食物は、魚のにしんと薄菜が中心である。笑談しあっているうちに、競漕の出発が開かれると、彼等は全て飲食を止め、顔色をかえ、注意深く遠くを観るために勾欄によりかかる。「われわれの船はあるのかないのか？」「勝っているのか、負けているのか？」といった問題が彼等の心の中で闘わされる。一瞬の間に勝負は決定される。その時、あるものは、あたかも屋根瓦をこわすことができるかのように興奮し、またあるものは、階下へ行く方法をも忘れたかのように、非常に興奮する。

人々は、それぞれの境界内の建物を借りることができる。花船や白船の地域に属する人々は、黒船の地域に入らないし、黒船や赤船の人々は、花船の地域には入らない。もし、誰かが他の地域の建物に入ることがあるとすれば、それはその人がそれを忘れたか、あるいは強い闘士であるかであり、そうでなければ、敢えてそうはしない。たとえ強い闘士であっても、しばしば恐い目に合わされるのである。観客が多くて、建物は十分ではない。それ故に、南岸には多くの食物屋があり、川には屋形船がある。南岸の人々は、北岸から南岸へ川を横断してくる船を全て明確に観ることができる。船が岸に近づいてくる時、もしその船が地区に属してないものであるならば、人々はそれに石を投げつける。船上の人々は、あたかも闘っているかのように、彼等の櫂を波うたせる。観客を乗せた船が、しばしば競漕中の船の進行を妨害する。もし、一艘が、競漕している船の真正面にいて、逃げることができないなら、その船は速座にばらばらに打ち壊されるであろう。南岸では、多くの果実や食物や酒が売られ、川では、太鼓や鐘が日没まで打ち鳴らされて、小船が往来し、船上では歌ったり踊ったりしている。その光景は、南岸も川もまことに美しいのである。

以前は、役人は万賢閣、神鼎桜、縣麗譙、臨沅樓と一般にいわれる建物から競漕を観ていた。建物は美しく装飾され、御馳走が彼等に用意された。船が到着すると、乗組員は最初に役人のところへ船舶臨検料を払うために行かねばならなかった。船は、着岸を競うためにできるだけ早く漕がれ、船上の太鼓は早く打ち鳴らされた。頭たちは、彼等の顔を「龍頭」(goose neck)の方へ向け、ひざまずき、役人にあいさつする。船が岸に到着したとき、頭たちは、役人に敬意を表わしに階上に行く。そこで、勝者に賞が与えられ、遅れてきた負者はとがめられるのである。万賢閣はずっと以前に倒壊していて、現在は存在しない。その万賢閣は、王室の取締官の薛瑄が、沅州の銀山の監督をしていたとき宿泊した建物であり、また、彼が龍場に追放に処される途中に宿泊した建物である。

勝利を得た船は、船尾の方向へ漕ぐ。乗組員は、櫂を垂直に立て、船上で踊り、太鼓を

打ち鳴す。負かされたものが、勝者の船の近くを通ると、勝者の乗組員に脅されるのである。負者の乗組員も同じように試みるが、力なく、あるいは遠方にいるかのように無言のまま、負けたことを認めるかのようなのである。船は日没になると散解し、頭の家では馳走が用意され、乗組員は全て食事するために集まる。勝者の家は、食物や酒が特にたくさんある。頭の近所の人々や親戚や友人が、彼を祝福するために訪れる。次の日、彼の家の門は、色付けされた絹布で美しく飾られ、馳走と演劇が行なわれる。ある人は、負けた者を嘲笑するために、負けた町の門に文章や短い詩を書く。ある者は、犬や亀をつるし、ある者は、草や果実を同じような目的のために吊す。負船の乗組員が門の下を通るときは、こうべを下げて通り過ぎる。彼等の親戚や友人が、彼等を嘲笑する目的で、時析そのような事をする。人々は、四月から多くの関心をもって、船のことについて話し始める。五月は競漕が行なわれ、勝者負者が決定される。しかしながら、勝負に関する話は八月九月までも続けられる。

競漕について、Mei Sheng-yü は、「争うことや溺死することは避けがたい」といっている。彼に対する私の回答は、龍船は普通の船より沈みにくいのである。もし、龍船が沈むことがあるとすれば、それは争った結果である。警察長官が、争うこと、船に竹や石(goose-egg stones) を隠すこと、そして瓦や煉瓦を投げつけることを禁止することはさほど困難なことではない。さらに、元来龍船の長さはずっと15尺(約 4.5m)の制限があり、櫂は30本の制限があった。1艘の大きな龍船を作る価格で、2、3艘の小さな船を作ることができる。彼等は、随意に競漕をすることができるが、激しく争う必要はない。もし、争いがなければ船は沈まないであろう。私が先に言ったように、競漕の慣習が止め得るものなら、それは今日まで待つことなく止められたであろう。もし、この慣習を根だやしにすることが不可能であるならば、私がここで言ったように行うことが最善である。

(完)

## 「あとがき」

中国における「ドラゴンボートレース」に関する文献資料は多いが、W. Eberhart の競渡の目的に対する解釈をまとめてみたい。

彼は、競渡の目的は「人身供犠」であるとする。即ち、人身供儀は、豊作を期待する人々の具体的方法であり、稲の成長と力強さを与えるために、人が宇宙の最も強力な創造者であるから犠牲にしたというタイ族の原始的な世界観で裏付けしている。その犠牲者は、head-hunting で得ていたが、この方法が中国文明の影興によって実践不可能になったときに、2つの集団間での模擬戦が一般的になった。その模擬戦のひとつに、2つの集団が川をはさんで相対し、歩いて川を渡る競争があった。その競争は、ひとりもしくは数人が死ぬことによって終るものであった。この代用として、「ドラゴンボートレース」は始まったと結果している。

したがって、彼は、屈原探搜の伝説的説明を否定し、競渡は人身供儀の一形態であることを主張している。このことは、沖縄のハーリーの中に「転覆競漕」があることを想起させる。

沖縄におけるハーリー研究の一環として、中国（湖南）の競渡に関する資料を抄訳という形で発表した。これだけで伝承的競漕の性格や意味を明確にできるとは考えてない。しかし、中国における競渡と沖縄のハーリーの類似点や相違点があることを認識したことは、大きな収穫といわねばならない。

この時点で、新たな疑問が生起するのは当然のことと言えよう。即ち、何故類似しているのか？何故相違しているのか？という発問である。

人間の「行為」であり「活動」である「身体運動」としての競漕が、民族・風土・文化的諸条件の中で生起し、変遷することは容易に理解できる。しかしながら、文化的環境の多くが変化したにもかかわらず、以前として古風な「競漕型態」が残存していることの意味も考えねばならない。

一般的にあって、民間伝承としての民俗は、きわめてその変化がゆるやかであるといわれている。この指摘は、伝承的競技にも該当する。何故、変化がゆるやかなのであろうか。われわれが、今、言い得ることは、少なくとも何んらかの意味で、宗教的要素を残在させようとする意図があるのではないかということだけである。換言すれば、個人の超自然的存在に対する態度としての信仰心意が、諸々の環境の変化にもかかわらず、きわめて強固であり、それが存続の基盤にあるのではなかろうかということである。